

イベント

## 沖縄芸能芸術祭2006

### —沖縄の原風景から現風景へ—

2006年7月7日、早稲田大学小野梓記念講堂にて、沖縄の古代芸能と現代芸術の相互交流をテーマとした、「沖縄芸能芸術祭2006—沖縄の原風景から現風景へ—」が開催されました。開催初年度である今年は、戦前から現代までの沖縄の芸能や芸術に関わる映像に焦点を当て、20本あまりの貴重な映像を、本会場とロビーのふたつの会場で上映しました。特にロビーでは、他の方と自由に言葉を交わしながら映像を楽しめる、ゆったりとした空間作りを目指しました。ひとつの映像を通して、新旧の沖縄を共有することのできる、非常に有意義な時

上映作品

「南の島・琉球」東京日日新聞社製作（製作年度不明、昭和初期）	「吉屋テレー物語」金城哲夫
「体育行脚」製作者不明（1929）	「女が男を守る島～沖縄・久高島の一年～」（1985）
「河村貞雄記録映像資料」（1937）	「チェンパレンの厨子壺」港千尋（2005）
「琉球の風物」「琉球の民芸」日本民芸協会制作（1939）	「Manakio 2002」「Manakio2003」前島アートセンター（2004）
「沖縄」東京日日新聞（1940）	「カッチャン ～還暦越えのロックンローラー～」琉球放送（2005）
「海の民・沖縄島物語」東京発声映画（1942）	「Electric Sashin ～沖縄・文化のチャムブルー～」ロイク・ストウラーニ（2005）
「米軍が捉えた沖縄戦映像」	「流転沖縄～沖縄1300余年の歩み」東京・沖縄芸能保存会（2006）
「護佐丸誠忠録」（1934）	「夢幻琉球つるヘンリー」高橋剛&市民プロデューサーシステム（2004）

早稲田大学社会科学部 修士課程  
田中 理子

間を作ることができたように感じます。当日は一部の映像の保存状態の都合により、上映できない作品が発生するトラブルもありましたが、夜遅くまでたくさんの方にご来場いただきました。



### ワークショップ —東洋と西洋の インターカルチュラルブレンド—

群馬県立女子大学 専任講師  
波照間永子

ニューヨーク在のコンテンポラリーダンスカンパニー Big Dance Theaterのアーニー・パーソン（振付家）とポール・ラザー（戯曲家・演出家）を招き、彼らが近年、精力的にすすめている日本を題材とした作品の創作意図「東洋と西洋のインターカルチュラルブレンド」について谷崎潤一郎『春琴抄』をダンス化した映像などを交えて解説していただきました。同カンパニーはJapan Societyの委嘱を受け、井伏鱒二作品に着想を得た新作を発表予定とのこと。沖縄の音楽を使用したいとのことで、フィールドワークの一環として当研究所を訪れたものです。

お知らせ

### 『琉球・沖縄研究』創刊号案内

早稲田大学文化構想学部 助手  
熊本 博之

本研究所の研究紀要である『琉球・沖縄研究』の創刊号が発刊される運びとなりました。オール・ヒストリー特集号と題された本号に収載されている論考は、熊本博之「オール・ヒストリー研究の現状と沖縄研究におけるオール・ヒストリー」、北村毅「沖縄戦の死者と生者の〈戦後〉」、熊本博之「普天間基地移設問題に対する辺野古住民の応答」、波照間永子「舞踊家オール・ヒストリー」、村松彰子「物語化された死者儀礼」、八尾祥平「1960年代以降の沖縄における地域社会の変化」、渡邊欣雄「個人と文化—津嘉山朝松の生涯」の7本です。専門とする学問の異なる執筆者たちが、沖縄に関するオール・ヒストリーを題材に、それぞれの観点から複眼的に沖縄を描き出しております。図書館や研究機関など、なるべく多くの機関に配本させていただく予定ではありますが、もしお近くに配本されていないようでしたら、研究所までご連絡いただけましたら幸いです。

報告

### ヴェネツィア「第5回沖縄国際シンポジウム」

早稲田大学社会科学部 博士課程  
小松 寛

早稲田大学琉球・沖縄研究所は、沖縄研究の国際化を支援する一環として、2006年9月14日から16日にかけてイタリア・ヴェネツィアにあるカ・フォスカリ大学にて行われた第5回沖縄研究国際シンポジウムを後援しました。沖縄国際シンポジウムは原則として4年に一度開催されてきましたが、今回のシンポジウムでは当研究所の客員研究員でもあるローザ・カーロリ教授が開催校のリーダーとして主導しました。沖縄はもとより、日本本土、さらには世界各地から沖縄研究者が集まり、のべ150人が参加しました。内容も多岐にわたり、最先端の沖縄研究の動向が報告されました。当研究所からは勝方=稲福恵子所長、我部政男客員教授、ヒュー・クラーク客員教授、波照間永吉客員研究員、渡邊欣雄客員研究員、後



報告

### 総合講座沖縄学

早稲田大学社会科学部 博士課程 小松 寛

オムニバス形式の本講義は、早稲田大学内外の沖縄に携わる研究者を多数招いて行われました。その専門は政治学、経済学、歴史学、文学、言語学、文化人類学、宗教学、カルチュラル・スタディーズなど非常に多岐にわたります。また、2006年度には琉球新報、沖縄タイムス両東京支社長を、2007年度は詩人と映画監督を講師として招き、研究者以外の視点も学ぶことができる良い機会となっています。またオープン教

育科目として設置され早稲田大学全学部の学生が受講できるため、個性あふれる学生が多く集まっています。登録数は前後期でのべ400人を越え、さらには院生や社会人も聴講に訪れました。多様な関心を持つ人々が沖縄という共通項で刺激を受けることができる授業であり、首都圏に「沖縄学」と題された講義が単位認定科目として設置された意義は大きいと思われます。



### 受講生の感想

	<p>○山内あかり 政治経済学部1年 「『沖縄』は何を発信し、世界で機能していくのか」</p> <p>私はこの1年間沖縄学を学び通し、単なるイメージではない客観的な「沖縄」を知ることができたと思っいます。歴史的な視点、様々な資料に裏付けられた逸話、他の国との対比を重ねて、さらに沖縄出身以外の教授から「沖縄」を学ぶことは、沖縄の中からは見えていなかった私を考えただけではわからないことを気づかせてくれました。例えば、なぜ自分の中に沖縄は特別だという意識があるのかを歴史的事実に基づいて追体験したり、資料から沖縄の知らずし喜ばしくない事実を知ることができたりしました。</p>	<p>○早川 青紗 スポーツ科学部2年 「向き合うこと」</p> <p>昨今沖縄ブームが今まで以上に激化しているが、当初自身の受講動機も、実にイマドキな類のものであった。 「日本語は多くの人が沖縄に對して抱いているイメージかと思う。だが敗戦後60年経った現在でも「軍事基地」が存在し、それが原因で多くの問題が起きている。これもまた同じ沖縄の一面なのである。しかし、メディアは狂ったように同じ一面しか映し出すとはせず、また政府は必死に何かを直隠している。 沖縄の問題にだけ対処すれば良いのではない。ただ、沖縄と真剣に向き合うことは、私たち日本人と、しっかりと向き合うことと等しいのではないだろうか。</p>	<p>○岡部由佳里 政治経済学部3年 「私とおきなわ」</p> <p>「私」について語る時、沖縄の存在を欠かすことはできない。そのくらい、沖縄はとも近い存在であり、またとても遠い存在でもあった。それは沖縄の血を引かずして、沖縄に育った者のジレンマでもあった。そしてこの「沖縄学」の講義は、時間の流れとともに忘れそうになるこの葛藤を再認識させてくれた。</p>	<p>○小林 千恵 社会科学部2年 「『沖縄学の現在』を受講して」</p> <p>「沖縄」という言葉がひとり歩きしてしまっているように感じているのは私だけだろうか。沖縄に對して観光地であつたり、沖縄戦のことであつたり基地問題であつたりが、「イメージ」として「日本人であれば誰でも抱く共通のもの」が存在しているように思う。しかし、そこからそれ以上踏み込もうとした時に、何となく言えないが踏み込みづらさのようなものを感じてしまふ。それはなぜか、受講してみても、沖縄の多様性がそうさせているのではないかと思ひ至つた。</p>
	<p>しかし「沖縄」を学ぶことはまだまだ導入段階で、私は今入り口に立っているようなものだと思ひます。講義を通して、もっと深く知りたいたいと思うことがありました。歴史、資料、外からの客観的視点、そして中からの現実の感覚を通して、そこから何が学び取れるのか、「沖縄」が何を発し世界で機能していくのかを、さらに考えてみたいと思ひました。</p>	<p>「減びゆく琉球女の手記」をめぐる事件である。女性が書いた琉球文学としての価値はさることながら、この事件を通して日本の琉球への差別と、琉球の琉球への卑下を見て取ることができる。「そんな卑下することないのに...」今の私はそう思う。自己の文化に誇りを持ってない当時の沖縄人の悲しみが心に染みだ。だが、この歴史が沖縄のアイデンティティーを意識させ、逆に日本のアイデンティティーを意識させたのではないか。東京でこの「沖縄学」の講義を聞く意義は、ここにあつたのではないかと私は思ふ。</p>	<p>今回受講したことがよつて、多角的に沖縄について触れ、考えることのできる場を得ることができたことに深く感謝したい気持ちでいっぱいです。</p>	<p>今私はいまだに高校の修学旅行で見たエイサーに関心があつて、それについての講義もあるかな、といったあいまない気持ちのもとに受講したのだが、毎回違う先生による違う分野についての講義を受けるうちに、沖縄の複雑性と、そしてなぜか悲しいという陰と陽で言うなら陰の部分を感じることもあつた。</p>

### 研究者、客員研究者による 琉球・沖縄関連出版書籍 (2006年度)



著者 高橋 孝代  
早稲田大学アジア太平洋研究科 学術博士

弘文堂

境界性の人類学  
重層する沖永良部島民のアイデンティティ



共同執筆  
佐藤 由紀  
早稲田大学社会科学部 博士課程  
田中 理子  
早稲田大学社会科学部 修士課程

成文堂

比較文化の可能性  
日本近代化論への学際的アプローチ  
早稲田大学社会科学部 学術院  
教授・照屋佳男先生古希記念本



共編著  
熊本 博之  
早稲田大学文化構想学部 助手  
桑江 友博  
武蔵大学大学院 博士課程

西田書店

沖縄の脱軍事化と地域的主体性  
復帰後世代の「沖縄」



著者 松島 泰勝  
東海大学 助教授

藤原書店

琉球の「自治」



著者 勝方=稲福 恵子  
早稲田大学国際教養学術院 教授

新宿書房

おきなわ女性学事始

## 照屋佳男 教授のご退職

琉球・沖縄研究所の設立に際して、大きな精神的支えになって下さった照屋先生。じつは、私が大学院に入ったとき、すでにゼミの大先輩で、語学の達人としてゼミ生の崇敬を集めておられた。同じ沖縄出身者として、とても誇らしかったのを覚えている。先生の膨大な数の著作は、徹底して「非近代的なもの」の再発見と評価に充てられていて、その方法論は沖縄研究にも必須。今後はご自宅を開放されて、無料の塾に力を注がれるとのこと、ご退職に際して次のようなご挨拶をいただいた。

「昔、米国のある将軍は『老兵は死なず、ただ消え去るのみ』ということばを遺したが、2007年3月末日をもって、42年間勤めさせていただいた早稲田大学から消え去る私の胸から、『琉球・沖縄研究所』に対する深い関心が消え失せることはない。」

(勝方=稲福 恵子)

## おめでとうございます 研究員の受賞

研究員 北村毅さん  
櫻井賞大賞受賞

研究員の北村さん(早稲田大学フューチャーズインスティテュート助教)が、沖縄戦をめぐる戦死者供養について論じた「沖縄シャーマニズムと戦死者祭祀ーヌジファにみる戦死者靈魂の此岸と彼岸ー」により、2007年1月27日、「第5回櫻井賞大賞」を受賞しました。「櫻井賞」は民俗学者・櫻井徳太郎氏の業績を顕彰し、若手人材を育成する目的で創設された賞であり、受賞論文は、3月に冊子として刊行される予定です。

沖繩学の優れた研究活動に贈られる、第28回沖繩文化協会賞(選考委員長・外間守善法政大学名誉教授)が10月23日に発表されました。波照間さん(群馬県立女子大学専任講師)は実技を基礎としながら舞踏学、歴史学、身体論等多角的な視野から琉球舞踊を研究。主に文学・芸能分野への功績を表彰する「仲原善忠賞」を受賞されました。なお授賞・講演会は11月23日に早稲田大学国際会議場で行われました。

客員研究員 波照間永子さん  
沖繩文化協会賞(仲原善忠賞)受賞

【研究所の出来事】  
12月15日、東京学芸大学附属大泉中学校2年の三澤諒君はじめ5名の学生と、引率の古家正暢先生が来訪しました。テーマは「沖縄が今、独立したらどうなるか」。当研究所からは勝方=稲福恵子所長、小松寛研究助手、田中理子研究助手、上地聡子さんが参加。琉球史の概説、冷戦構造の説明から始まって、沖縄を手がかりに、国際社会において自分達は如何にすべきか。にまで話は及びました。



お知らせ

## 総合講座「沖縄学 (Okinawan Studies)」

金曜 6限 (18:00~19:30)、早稲田大学西早稲田(本部)キャンパス8号館B102教室において、沖縄学講座を設置しております。聴講ご希望の方は下記FAXまでお申し込み下さい。

FAX: 03-3202-2542

(送信の際には冒頭に「沖縄学 聴講希望」と明記して、お名前、ご連絡先、希望される日程の講師名をお書き下さい)

※講義テーマの標題は、ゲストスピーカーの要望で多少変更することがあります。

## ○ 前期 沖縄学の構築

4月13日~7月20日

1	4月13日	導入概論「沖縄学への招待」	勝方=稲福恵子(早稲田大学)
2	4月20日	「沖縄三線音楽—楽器、音階、言語など」	新城亘(沖縄県立芸大・博士、演奏家)
3	4月27日	「琉球の中国への進貢と対日関係の隠蔽」	紙屋教之(早稲田大学)
4	5月11日	「島嶼経済史の視点から見た沖縄の位置づけ」	松島泰勝(東海大学)
5	5月18日	「言語政策とポストコロニアリズム」	ヒュー・クラーク(シドニー大学名誉教授・早稲田大学客員教授)
6	5月25日	「おきなわ女性学事始—『執心鐘入』と『道成寺』」	勝方=稲福恵子(早稲田大学)
7	6月1日	「言語学的、音声学的に見た沖縄の言語」	上野善道(東京大学)
8	6月8日	「21世紀の平和と憲法—沖縄からの視点」	水島朝穂(早稲田大学)
9	6月15日	「琉球・沖縄の詩歌と言葉と民族と」	高良勉(詩人)
10	6月22日	「人類学的・宗教学的に見た沖縄の祭祀」	川橋範子(名古屋工業大学)
11	6月29日	「沖縄イメージの誕生:カルチュラル・スタディーズと沖縄」	多田治(一橋大学)
12	7月6日	「映像人類学と沖縄」	北村皆雄(映画監督)
13	7月13日	期末試験(登録学生のみ)	試験監督:勝方=稲福恵子+TA
14	7月20日	「まとめ、講評」+映画	勝方=稲福恵子(早稲田大学)

## ○ 後期 沖縄学の現在

10月5日~1月25日

1	10月5日	「沖縄学への招待」	勝方=稲福恵子(早稲田大学)
2	10月12日	「中琉関係史」	西里喜行(琉球大学名誉教授)
3	10月19日	「もう一つの沖縄—宮古・八重山文化圏」	波照間永吉(沖縄県立芸術大学)
4	10月26日	「アジアの中の沖縄音楽」	比嘉悦子(沖縄県立芸術大学)
5	11月9日	「沖縄近現代史と『本土化』『国民化』政策」	我部政男(山梨学院大学)
6	11月16日	「久高島の王権儀礼」	小山和行(法政大学)
7	11月30日	「ヨーロッパにおける琉球の美術・民具コレクション」	ヨーゼフ・クライナー(法政大学)
8	12月7日	「表象としての沖縄」	田中康博(国際基督教大学)
9	12月14日	「戦後日本のジャズ喫茶と沖縄」	マイク・モラスキー(ミネソタ大学)
10	12月21日	「沖縄の政治(基地問題/地方自治問題)」	江上能義(早稲田大学)
11	1月11日	「沖縄の脱軍事化と地域的主体性」	熊本博之(早稲田大学)・畠山大(明治大学)
12	1月18日	期末試験(登録学生のみ)	試験監督:勝方=稲福恵子+TA
13	1月25日	「まとめ、講評」	勝方=稲福恵子(早稲田大学)

おくやみ

## 川平永介先生ご逝去

昨年12月5日、当紙のタイトル文字筆者である川平永介先生ご逝去。享年87。東京八重山文化研究会会長等、東京での八重山、沖縄に関する活動に尽力。永介先生、八重山民謡「鷺の鳥節」の雛鳥の如く、飛び立ったばかりの研究所の活動を、墨書の陰からずっと見守ってくださいませ。

(関東黒島郷友会 大川安子)

## 【早稲田大学琉球・沖縄研究所 webサイト】

琉球・沖縄研究所の最新情報や月例研究会の案内(毎月第3火曜日開催、ただし変更の可能性あり)をお届けしております。ぜひご覧ください。



<http://www.waseda.jp/prj-iros-waseda/>

## 【ご寄付の受付先】

みずほ銀行

早稲田支店 普通口座 2135387

口座名: 早稲田大学 琉球・沖縄研究所

## 【早稲田大学琉球・沖縄研究所 事務局】

早稲田大学 琉球・沖縄研究所 支援委員会事務局

〒102-0073

東京都千代田区九段北1-8-2

新宿書房 内(担当:川平)

電話:090-6029-6096

FAX:03-3262-3393

早稲田大学 アジア研究機構  
琉球・沖縄研究所  
The Institute for Ryukyuan and Okinawan  
Studies in Waseda University

所長:勝方=稲福恵子

副所長:江上能義

〒169-8050

東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学 アジア研究機構(9号館9階)

電話:03-5286-1384

FAX:03-3202-2542

URL:<http://www.waseda.jp/prj-iros-waseda/>

e-mail:katakata@waseda.jp

[琉球・沖縄研究所 支援委員会 事務局]

花井玲子・岩崎りり子・川平いつ子・真栄田雄子

[ニューズレター編集局]

金城正紀(誌面デザイン)・田幸亜季子(編集)・

勝方未来(図画デザイン)